

乙卯年秋祭り俵もみ

木遣音頭集

監修堂河内弘 編集者 島村保

委員平稻義雄・高瀬透・森繁

山田正治・金子明弘・内田史穂

森脇勝義・東窪信之・丸本健次

連絡人 久留田久美子

これより以降に新たに収集したものを加えて編集し
第一回編集発行より満十年を経るこの度 発行
することにした。――

平成十四年六月吉日

島村保

十 湯蓋の道空

古老の位へ今も尚く
中右の頭にも海老市

貪りも通夫の位みにけり

其の名は道空 道昌と

我が家のほとりち湯わけは湯蓋の魁も残りける

誠の道にいそしみて
通獵の魚は宮多に

あるは

或日 道空宮多の

36 アーろ不思議と蓬束の

五百余年のその昔
海老山の山麓に

仲睦まじき夫婦なり

湯蓋の魁も残りける

そとも道空常日頃

巖島大明神を信仰し

日毎供えて久くるを

真心神に通じけん

沖の浪獵にいでし時

浮と金沙の中を潜り

不審に思い道空は

金沙を船に吸み入る如
日々家運転回し

汝の長者となりけり

時は人皇第百二代

永享二年庚戌の年なりき

此巖を神明の靈験と

客人社壇を再興し

黄金はめたる三尊の神像

尊像寄進せりとかや

乙未土火拓き巖を神社の撰社として

壇宮の神を相殿に

社殿再興のお宮こぞ

實にみ恵か その日より
富貴日に増し道空は

後花園天皇の御幸にして

道空深く感激し
敬神の念より厚く

一歩の財宝拵げ出して
かつ大宮拜殿の正面に

更に道空海老の巖に

徳田の彦を神まつる
壇屋神社の興りなり

又つも新しき変りて里人の

信へも床し道空の

浮舟を悩み只一ッ

親の心を子知らずか

逆さに舟をのぼるれば

人皆呼んでアマンジヤク

道空幾度か訓せども

逆に余命のなきを知る

道空或る日はアマンジヤク

死後も遠屋の明神の

永遠に任えまらうんと

逆さに舟かたは如何せん

心にもなく子の前に

津之根を島に葬れと

一息子よありけるが
今よ云うこと右左

わけて余いつく育ちける

改かことのなつてぶて

死の枕辺に呼び寄せ

庵のほとりに納まりて

思うべかアマンジヤク

おれこの言葉あの沖の

云遺しとぞ果てにける

さら死後さしものアマンジヤク

たまた一つの孝行を

そのまゝ守りて父の墓

海老沖の津々根島

終始不幸の子なりける

扱・光陰は矢の如く

荒れし社殿に往年の

村人憂いて相謀り

造営せむ時相殿の

海老山より出にけり

あゝ有難き神慮そと

神とあがめ年々この

里に始め漁り人

霊験いかにあらたかに

守り給いつ今日の日を

復興・塩屋の夏祭り

行わるべき尊とくも

淋しき孤島に建てしとは

道空死して幾日を霜

その名も次弟に世傳るをぬ

ひととせ塩屋明神を

道空夫婦の木像か

宮にまつりてその徳を

塩屋の祭りにもにぎわしく

誠捧げて祈らんば

迎へし由緒朽つるまで

道空祭も盛大に

あは有難きとくも